

平成29年度第1回清瀬市総合教育会議

平成29年度第1回清瀬市総合教育会議が平成29年5月23日午後1時30分に招集された。出席委員、議事の概要は次のとおり。

- 1 日 時 平成29年5月23日（火）午後1時30分から
- 2 場 所 健康センター第3会議室
- 3 出 席 者 渋谷 金太郎（清瀬市長）
坂田 篤（清瀬市教育委員会教育長）
宮川 保之（教育長職務代理者）
植松 紀子（教育委員）
粕谷 衛（教育委員）
兵頭 扶美枝（教育委員）
- 4 オブザーバー 矢ヶ崎 直美（子ども家庭部長）
長井 満敏（教育部参事）
福泉 宏介（統括指導主事）
- 5 事 務 局 今村 広司（企画部長）
石川 智裕（教育部長）
南澤 志公（企画課長）
粕谷 勝（教育総務課長）
- 6 書 記 大津 雄平（教育総務課）

議事日程

1. 開会

2. 協議事項

(1) 21 世紀を生きる子供たちを育むために家庭・学校・地域・行政は何をすべきか

(2) その他

3. 閉会

午後 1 時 30 分開会

(南澤企画課長)

時間がまいりましたので、これより平成 29 年度の第 1 回清瀬市総合教育会議を開催いたします。この会議は、市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、地域の教育課題やあるべき姿を共有し、より一層市民の考えを反映した教育施策を推進するために、その協議の場として開催するものでございます。それでは市長、開会のご挨拶をお願いします。

(渋谷市長)

お集まりいただきありがとうございます。本日は 21 世紀を生きる子供たちを育むために家庭・学校・地域・行政は何をすべきかを議題といたします。今回も活発な議論をお願いします。

ここから先は、坂田教育長に進行をお願いいたします。

(坂田教育長)

それでは、私から進行を務めさせていただきます。

今、市長からご紹介いただいたように、21 世紀を生きる子供たちを育むために家庭・学校・地域・行政は何をすべきかを議題として議論したいと思っております。

今日の議論の流れですが、私から問題提起をさせていただいて、議論のたたき台として、子供を駄目にする 8 つの方法という文章を皆さんで共有していただきます。これは後ほどご説明しますが、非常に刺激的なことが書いてあります。逆に、これを全面否定していただかなければならないような文章なので、ぜひフリーディスカッションでご意見を聞かせてください。

これを議論のたたき台にした中で、家庭教育の現状はどうか、本市における家庭教育の現状はどうかというところの意見交換。そして、具体的方策で、議論のまとめという流れにしたいと思います。

では、最初に問題の所在ということで、このテーマを設定した背景を私からご説明します。お手元に資料がありますので、そちらを見ていただければ結構です。

少子高齢化、情報化、グローバル化、科学技術の進展。このような言葉は聞き飽きるぐらい聞いています。

このような時代を子供たちが生きていかなければなりません。彼らが社会の中核になる 20 年後には、これらの変化はいつそう劇的に進んでいくことは、必然だと思っています。

例を挙げれば、人工知能が成熟して、今ある職業の 47%が自動化されて、67%が形を変えるか、なくなるという将来予測があります。ということは、やはり

教育そのものが変わっていかなければならないという、これは事実ではないかと思っています。

このような社会では、新たな価値を生み出す力、未知の状況にも対応できる考える力や判断する力、異なる価値観を認め合いながら課題解決ができる力などが、国語の漢字を数多く書ける、算数の計算問題が早くできる、歴史の年代を正確に記憶しているという力以上に、この力を否定するものではありませんが、それ以上にこういう力が必要になってくるであろうと考えます。

そして、何よりも人として豊かに生きるための優しさや思いやりの心、少しのことではくじけない^{しな}撓^{したた}やかで強かな心、人生 100 年を健康に生きることができる体。自らのよりどころとなる郷土を愛し、誇りに思う気持ち。そして、学び成長し続ける強い意志を育てなければならない。これから先の教育は、このようなことを担わなければならないと問題提起します。

子供たちにこのような力を育むために、われわれ家庭、学校、地域社会、そして行政は何をすればよいのか。これまでしっかりとこれを話し合ってきていませんでした。市長も交えてこの議論ができることを、私は幸せに思っています。

ただし、本テーマはあまりにもスパンが広いため、議論が拡散する恐れがあります。従って、今回は育ちの原点である家庭、これに焦点を当てて議論することを提案します。また、今後数回にわたって学校は何をすべきか、地域社会は何をすべきか、行政は何をすべきかというそれぞれの視点を絞って、継続テーマとしたいと考えます。

なお、今年度より既に稼働している、第 2 次マスタープランにおいても、家庭教育への支援が柱の一つになっております。やはり、育ちの原点でございます。

具体的な施策としては、家庭教育の手引きを作成しましょうという実行計画のプランがございます。総合相談支援センターも設置していきましょうというプランがあります。また、教育委員会と PTA の懇談会を実施していきます、というような例が示されています。

本総合教育会議において議論された事柄は、実行計画のローリングにおいて検討をしていきたいというふうに考えます。

では、このような問題提起を受けていただいて、この図を見ていただけますでしょうか。これは参考としてお示ししてあります。家庭、地域、学校は何をすべきなのかというところです。いわゆる、今回話し合いになる、この中心になる家庭では、わが子にたくさんの愛情を注ぐことが役割。命の大切さとしつけを教えることが役割。社会におけるルールを学ぶ、強い心と健康な体の基礎

を培う。家庭の温かさ、支え合い、生きる素晴らしさを体得させる。私は、これが家庭の役割だろうと考えます。

学校は、それでは何をすべき所なのか。子供を賢くするところ。賢さというのは算数の問題だけではないことは、先ほど問題提起をさせていただきました。心と体を育てること。多様な人との触れ合いの中で関わり方、考え方、生き方を学ぶ所。基礎的な知識や技能を学ぶ所。困難体験を与える所。

地域はどうなのか。より多様な年齢、いろんな年齢の人たち、いろんな立場の人たちと触れ合うことで社会性を身に付けて生活力を高める場所。たくさんの人に見守られている安心感や安定感や自己有用感。自分は価値があるというふうに思える気持ちとともに、地域の一員である自覚が高まる。

この3者がしっかりと手をつなげば、子供は健全に育っていくと思います。

本日は、この家庭について焦点を当てて議論をしていきます。

もう1点、データを示します。これは清瀬市の家族構成の現状ということで、国勢調査から引用してきた資料です。ご覧いただいたとおり、清瀬市の平成22年と平成27年、そして東京都の平成27年と比較をしております。

一人親家庭が、若干減りつつある傾向にある中で、やはり東京都に比べて本市は高い傾向にあります。また、夫婦と子供世帯についても高いのですけれども、3世代同居家族も東京都に比べて多いと。本市では3世代同居世代も多いが、核家族も多いという。これは、いわゆる異なる価値が両方存在していると考えていただいていると思います。こういう実態にあるということも頭の中にお入れいただければと思います。

では、議論のたたき台として、子供を駄目にする8つの方法をこれから共有したいと思います。

まず、断っておきますが、これは出典不明としてあります。実は、下敷きになるものはありましたが、8割方私が考えました。非常に嫌な文章です。あえて嫌な文章を議論のたたき台として示させていただきます。全面的に私などは心の中で反対をしながら書いています。では、指導課長に読み上げていただきますので、座ったままで結構です。お願いします。

(長井教育部参事)

「子供をダメにする八つの方法」

(1) 子供のために時間を使うことはやめましょう。

人生は一度きり。あなたは、あなた自身のために時間を使うべきです。子供を抱きしめたり、話をしたり、食事を作ったりしている暇があるんだったら、自分がやりたいことをやったほうが幸せです。

子供は栄養を与えておけば大きくなります。だからコンビニ弁当で十分です。

お金さえ与えておけば、おなかがすいたら一人で買いに行って食べるでしょう。

でも時々子供を連れて外食もいいかもしれません。そんな時は居酒屋がおすすです。夜中までお酒を飲んだりおしゃべりをしたりできます。子供は飽きたら静かに携帯ゲームをやっているか他の客さんの迷惑を顧みず走り回って遊んでいるはず。決して手がかかりません。

スマートフォンは便利です。面倒な「お守」もしてくれます。泣いている子供もアプリで遊ばせればすぐ泣き止みます。なるべく小さなうちからスマホを与えてあげましょう。

時々後ろめたい気持ちになるかもしれませんが心配無用です。親がかかわりすぎると子供は自立できなくなるからです。小さなころから放っておけば、きっとたくさん手をかけた子供以上に、自分で考え、判断できる子供に成長してくれるはず。

(2) 「すべての時間を子供のために使う」という逆の方法もあります

子供がかわいいと感じたら、あなたのすべての時間を子供のために使うとよいでしょう。いくつになっても手とり、足取り教えてあげるのです。

時々宿題もあなたがやってあげましょう。子供が苦しんでいるのだからそれを助けるのは親として当然のことです。何よりもあなたがやったほうが完璧にできるし、何よりも「素晴らしい子供を育てた」というあなた自身の評価になるのですから。

なるべく子供のわがままを聞き入れてあげましょう。きっと子供は自分の思いや願いをすべて受け入れてくれるあなたのことをいつまでも大切にしてくれることでしょう。これこそが「親子の絆」です。

(3) 勉強は100点が取れて初めて意味があることを徹底して教えましょう

一番重要なことは「勉強して周りの中で一番優位に立つこと」「良い成績をとること」「よい評価を得ること」だけを目指にする子供に育てることです。「勉強が面白い」「楽しい」等といたら、すかさず水をさす言葉を与えるのです。

「そんなことはできて当たり前。できないやつは、馬鹿なのです。」常に声に出して言い聞かせましょう。

幼いうちは「なぜなの?」「どうしてなの?」とうるさいくらいに聞いてきます。

一つ一つ教えていたらあなたの体がもちません。適当に聞き流すか無視をするか、「そんなの私もわからない」等と突き放しましょう。

学びの喜びを引き出してはいけません。そんなことをすれば、学ぶことそのものをおもしろがるようになり、入学試験に関係ない音楽や図画工作のような勉強に能力を使う馬鹿げた子どもになってしまいます。

また、結果をすぐに求めることも重要です。待つことはありません。結果が全てですから、途中経過なんてどうでもよいのです。参加することに意味があ

る？努力することに価値がある？何をきれいごとを言っているのですか。100点取れなければ価値がありません。勝たなければ意味はありません。

(4) 暗示の力を活用せよ

子どもが失敗したときがチャンスです。「馬鹿だと思ってはいたが、やっぱりそうだったか・・・」何度もつぶやくのです。うまくやってください。深く落胆したフリをして、聞こえるか聞こえないかといった感じで、潜在意識に届けましょう。

わざと難しいことをやらせて失敗させ「失敗するのは頭が悪いからだ」と思わせましょう。「頭が悪いのだからしかたない」となぐさめましょう。「能力」は生まれつきのもので、努力したからといって、頭が良くなるものではありません。身の丈にあったことをやっていけばいいんです。あきらめさせるのが人生を達観した大人の務めです。

(5) あなた自身がダメな親になりなさい

あなたが立派な親になっては元も子もありません。あなたが勉強してどうしますか。ダメです。あなたが達成感を味わったり、思いやりをもってどうしますか。

人の悪口・陰口は欠かせてはなりません。バレなければいいんです。悪いことをしてもいいんです。

バレれば開き直ればいいんです。人を小馬鹿にして楽しみなさい。からかいなさい。そして肝心なことは、それを子どもと楽しむことです。

(6) 先生に感謝する必要はありません

先生を軽蔑して悪口を言いましょ。有名な大学を出ていない先生は馬鹿ですから、子どもから距離を置かなければなりません。そんな先生の言うことを聞いたら馬鹿になりますから、そのことを言い聞かせましょ。

子供に「そんなこと塾でとっくに教わった」と言わせると先生は深く傷つきます。そもそも公立学校の先生は公務員なんだから、子どもの世話をした当たり前。私たちの税金で生活しているのだから、偉そうにするのが間違いなのです。

先生の悪口を子供の前でたくさん言うことがポイントです。周りの人が「良い先生」といっても関係ありません。服装でも話し方でも何でもよいので、先生の悪いところを徹底して子供に刷り込んでください。

(7) 両親が争う姿を見せましょ

夫は妻に、妻は夫に罵倒して勝ちましょ。できることならその姿を子供にも見せてあげてください。決して譲ることなく相手をやり込める必要があること、それが「勝ち組」になる重要なポイントであることを、両親の姿で教えてあげましょ。

(8) 学校のミスは徹底して弾劾しましょう

所詮学校の先生などはサラリーマンだから、真剣に子供のことなど考えていません。口先では「一人一人の子供は大切」等といっても、本音は「面倒なことはやりたくない」「責任は取りたくない」です。

もしもあなたの子供がいじめの被害者になったとしても、型通りのことしかやってくれないはず。そんな時は徹底して先生を弾劾してください。

先生が「あなたのお子さんがきっかけを作ったのですよ」等、ふざけたことを言ったら、親の責任として最後まで、自分の子供が言っていることを信じて否定し続けるべきです。それでもしつこく言ってくるようだったら「教育委員会に言う」とか、「弁護士に相談する」とか伝えれば屈服するでしょう。最後の手段は「いじめられた子供を守らない担任」等とSNSで情報を拡散することです。きっとあなたの子供を特別扱いしてくれるようになるはず。

これらはすべてかわいい子供のためです。頑張ってください。

(坂田教育長)

ありがとうございます。非常に苦しい、聞いていてとっても苦しくなるような文章だったと思います。私も書きながらとても苦しく思いました。もう聞いていたくなかったと思うのですが、少なくとも、ここには相当デフォルメをして書いてありますが、こういうふうに感じている親も少なくないというか、中にはいるのではないかと思います。

ちょっと非常に刺激的な文章だったので、いろいろ思うところがあると思うのですけれども、ここからフリーディスカッションに入りたいと思います。まず、この文章を一番はらわたが煮えくり返って聞かれたのが、兵頭委員ではないかと私は思うのですが、ついこの前まで校長をしてらっしゃいましたので、まず率直な感想を聞かせてください。

(兵頭委員)

この資料を頂いたときに、読み進めるのが苦痛でした。そして、やはり確かに、こうじゃない、この逆をやってほしいのだなというお気持ちでこれを作られたのだなというのを感じました。

また、特に最後のほうで、子育ては家庭だけで完結しなくちゃいけないようなイメージが浮かびました。例えば、学校の先生の意見は聞かなくていいとか。親自身が、周りと手をつなぎながら子供を育てていくんだという意識が感じられなく、全体の中では印象に残りました。

価値観があまりにも偏っていて、丸かバツか、100か0かっていうような価値観を持つこと自体が非常に危険だと感じます。例えば、少しこういう偏りがあ

る人がいるかもしれないけれども、でも、その人の中にちょっとこれはおかしいんじゃないかなっていうバランスを取る部分だとかあり、親の全てを一面だけで見ちゃいけないと思います。

自己肯定感を子供にも持たせて、高めなくてはなりません、親自身もそうだと思います。親もやはり自己肯定感を高めて、自分が認められる存在でなければ、子育てにも自信がないし、そして家庭も元気にならないですよ。

そうすると、その親の自己肯定感っていう辺りのところで、今十分でない親についても、何らか良さを引き出していく手掛かりになるようなことが、こちらの施策として何か必要ではないのかなというように感じました。

(坂田教育長)

なるほど。今、いいご指摘を頂きました。親が周りと手をつなぎながら子育てをしていくという視点が重要ではないかという問題提起。それと、やはり親自身の自己肯定感を高めていく必要がある。親もやはり子育てに悩んでいるのだと。そこをどうやって支援していくべきなのかというような、2点の問題提起を頂いたように思います。

これは、臨床心理の立場でいくと、相当ストレスがかかる文章だったと思うんですけども。植松委員、いかがでしょう。

(植松委員)

実はこれはあり得ない、徹底的に逆のことを書いてらっしゃることは、とても分かっているのですが。時にはいらっしゃるんですよ。

面接に来ている方でも、「それってあり」っていう方はいらっしゃる。あなたが、あなたの子供が、あなただったらどうなるのっていう話。100点じゃなければいけないとか、そういう人は中にはいらっしゃいます。

なければならぬっていうよりは、やっぱり一番じゃなければ、だつていい学校、いい大学、いい会社に入らなければ、この子の人生は全然意味がないですっていうふうにおっしゃって。じゃあ、あなたのご主人も一番なのかと。社長ですとか、医者ですとか、いろいろおっしゃるんですけど。じゃあ、そうやってほしいわけっていう話をすることはあります。

でも、ここまで徹底的にはしないし、全ての時間を親のためというふうには考えてないし。全ての時間を子供に使わなければならないとも考えていないんですよ。それはちゃんと分かってはいる、頭では分かっているけども、考えの一番最後の目標として、子供は私が助けなければ生きていけないというか。この日本の国の中では認められる人にならないのではないかという幻想みたいなのを抱いている人は、いることは間違いないっていう感じはします。

それがその、現実子供が学校へ行かないとか、それからリストカットするとか。それから、悪い仲間のほうに走ってしまうとか、極端な行動をしてくれれば分かるんですよ。もう極端に言ってしまえば、そういう極端なことを親の、自分の人生のように子供の人生を考えてしまっている人に対しては、どう言っても聞かないという家は、徹底的に子供に落ちていただきましょうっていうことを言うことがあります。

子供が徹底的に落ちるところまで落ちてしまわないと、あなたには理解できないのねって。その時になって、初めて分かるっていうことがあるという話をするところがあるんです。カウンセラーとしては、そういう言い方、本当はしてはいけないんですけども、ダイレクトに言わなければ分からない保護者もいらっしゃるので時々は言います。

それから、やはり何ていうんでしょうか。スマホも、与えるなって。脳のためには良くないんだとか、精神的、情緒的にも良くないんだっていう話をして分らない親がいます。見せていけば頭が良くなるというふうに、やっぱり勘違いしている人たちもいらっしゃって。だって、すぐに答えが出てくるじゃないですかって、こう言います。

早く答えを出したほうがいいんですという方もいるんですよ。そしたら、自分で考えるっていう力はどうするのって言ったら、ある年齢になってくるとそれは分かっていくと思いますって。ある年齢って幾つっていうふうに聞くと、5年生、6年生になったら自分で考えるんじゃないんですかって。

でも、中学になったらきっとあなたの考えに対して反対してくるので、きっと子供は親の言うままには動かなくなってくる時期が出てくるけども。その時に、あなたの手に負えない子供が出てきて、そして、スマホがこういうふうに言っているっていうふうに言ったらどうするのっていう話をするところがあるんですよ。

(坂田教育長)

これは、植松委員、そういう親に対してどういうアプローチをするんですか。

(植松委員)

私は、やっぱり極端に走ってる方には、何を言っても。自分の付属物と思っているんですよ。子供っていうのは、自分のバッグとか手帳とかと同じ。

(坂田教育長)

そこはもう救いようがないっていう話ですか。

(植松委員)

そうなんです。だから、違うよってということがもう入らない。

(坂田教育長)

そうなる前に、手を打たなければならないということですね。

(植松委員)

だから、そういう考えまでいってしまった人には、子供がある程度駄目になっていくのは目に見えているんですよ。こういうふうになっていくからねって言って、それでも続けて来てくれる人はいいいんです。なってく過程を私に教えてくれるので。そうすると、どこかでストッパーが効くんですよ。すると、最後の線が行動です。

(坂田教育長)

本当に今、生々しいお話をお伺いして、生々しい対応をお伺いしました。そういう中で、もうそうなる前に、やはり手を打たなければならないというように、今ちょっと示唆を頂いたような気がします。

家庭の親という立場で、こういう気持ちって私、親の中に非常に極端に書いてありますけれども、なくはないと思っているんです。私、実はこの文章を書くときに、自分の気持ちも振り返りながら書いています。なくはないはず。粕谷委員どうですか。

(粕谷委員)

今、教育長がおっしゃったそのとおりで。僕はちょっと2つ、どきっとしながら読んでいたんですけど。

前半部分と後半部分で、まず前半部分に関しては4番まででしょうか。幾つか当てはまる、アンケート形式だとしたら、三角ぐらい。丸はないと思いますけども。

正直言うと、恐らくどの親も、少なからずどきっとする部分があるんじゃないかなと。ただし、僕も人間ですからものに頼ってしまったり、スマホに頼ってしまうっていうことも正直あるんですが。そこに罪悪感を、恐らくこれは感じてないというふうな前提で書かれているので。ほとんどの親が罪悪感を持ちながらやっているというふうに思いたいなど。親がそこに罪悪感を持たずにやっているとしたら、本当に怖いことだなと思いつつながら、前半部分を読ませていただきました。

そして、後半部分に関しては、私の職場での体験から言うと、これに近いよ

うな形で、やはりクレームを入れてくる方っていうのも。決して先生が偉いと自分自身は思っていないかもしれませんが、全く立場が逆転しているというか、上からものを言うてくる方というのが非常に多いと。

そういう方のお子さん、この子は萎縮していると、園で。恐らく家庭でもそういうふうな扱いを受けているのではないかと思いましたので。この後半部分に関しては、僕は自信を持って否定ができます。

(坂田教育長)

なるほど。親は子育てに対して自信がないっていうお話が、先ほど兵頭委員からもありましたけれども。自分が楽をするとか、自分の行いに対して、子育てに対して罪悪感を持っている部分もあると。そこに気付かせてあげるっていうことも必要なのかもしれないですね。そのようなお話を、まさに親の立場からしていただいたように思います。

宮川委員、どうでしょうか、この文章。

(宮川教育長職務代理者)

先にメールで頂いたので、これから日本の社会を支えてくれる若き女性たちに見てもらったんです。女子大生ばかりですが。いろいろな話を交わしている中で、やっぱり分かっているんですね、これはおかしいとか。だけど、行動とは別っていう。ここも分かっているんです。意識と行動が本当に分離してしまっているのが。これはどうしてなんだろうかっていうことは、実は教育、学校教育の中でもう一度、小学校 1 年生から、こういうことについて少し考えていかななくてはならないのではないかっていうことはある意味思います。

例えば、括弧の 2 の 3 つ目のところで、わがままを受け入れる、自分を大切にしてくれる。例えば、こんなことあり得ないというか、若き女性たちは言うわけですよ。だけど、現実はこのままでしょうと。じゃあ、そこはどうするんだっていうことが 1 つと。それから、話題が発展していった、家庭の教育力ってちょっと抽象論ですけど。本当は教育力、例えば、低いと言われるような状況と高いと言われるような状況。これがだんだんと台地のような形になってきているのではないかと。以前はやっぱりある所に、教育力っていうのは高い所にとどまるような部分があったんじゃないか。それは学校教育っていうよりも、社会のいろんな文化とかそういうものを大事にしてきた社会が。

例えば、割合、縦軸。教育力の低いのと高いのを横軸に取った場合に、例えば、かつてはこういう高い所に教育力があつた。それは家庭の教育力っていうのがそういう社会に支えられた。でも、今はすごくなだらかな高原状態になってきてしまっているのではないかっていう話をいろいろしている中で。これが、

だから意識と行動の分離した状態なんじゃないかと。

そうすると、じゃあこういう高い状態に持つていくためにはどうしたらいいのかっていうと、自分たちの住んでいるまちとか、自分たちが大事にしなくちゃならないことって何なのかっていうことを、教育という中で、もう少し何か具体的に手立てを講じていかななくてはならないんじゃないかと、今のところ思っています。

(坂田教育長)

自分たちのまちを見直すことによって、家庭にももしかしたらそういう誇りとか、自分たちが行うべきことは何なのかっていうところが見えてくる。いわゆる、地域の力を高めることによって、意識を高めることによって、家庭もそこに引きずられていくのではないかと、そういう仮説でよろしいですね。

(宮川教育長職務代理者)

そうですね。ですから、こういう高原状態というか、台地状っていうのかな。こういう状態になっているのを、どちらか高いほうに持つていくためには、そういう地域の文化とかそういうものをもう一回見直していく。その中に自分があるんだっていったときに、意識と行動の分離っていうのは少し寄せられていくのではないかと。

(坂田教育長)

なるほど。これも貴重なお話がありました。

矢ヶ崎部長、いかがでしょう。やはり子育てって、教育に入る前の部分で、非常にこれは大きい問題だと思うんですけども。こういう実感をされた、こういう保護者の方、親のほうの実感をされた例とか。もしくは、ご自身の感想でもなんでもいいのですが、ちょっとお話しください。担当部長として。

(矢ヶ崎子ども家庭部長)

特に私のところは、子供のために時間を使うことはやめましょうっていうところに、結構リンクするところがありまして。保育園で、ついこの間もありましたけども、4歳とか5歳とかになってきますと、保育園でも教育の継続性を保つために、親御さんがお休みじゃなくても、お休みでも、継続して平日保育に来てくださってなるのですが、乳児ではお休みの時に子供を預けるのを遠慮してくださってというのは、親御さんからすごい苦情になります。そういうのを聞いていると。たぶん今、子育てが親御さんにとって負担感としてなっている。ですから、親御さんの支援のほうがすごく今、保育園でも高くなってきて

います。そこにやっぱり現役の保育士たちが、気持ちが追い付いていかないと
ころがあつて。

(坂田教育長)

なるほど。親への支援という視点がやはりこれは必要であろうと。非常にこ
れも示唆のあるお話でした。市長、もう一回断らせていただきますが、これは
私の本意で書いた文章ではありませんので。そこだけはぜひ誤解なきようにお
願いしたいと思うんですが。いかがでしょう、この文章。

(渋谷市長)

この時代を日本は体験してきている。それが、だから社会事業大学の校歌に
しっかりと表れている。昭和 21 年に、社会事業大学の前身の社会事業学校が原
宿に作られて。その校歌がまさに。3 番目というのが、『自由の鐘のなるところ、
友愛の丘、月澄めり』。その次の文章だよ。『汚濁、貪婪、すさぶ世に』だつて。

汚濁おじよくってどういう意味かというのと、汚し、辱めること。貪婪どんらんは、ひどく欲が
深いこと。婪という字も、初めて見たよ、あの社事大の校歌の中で。林という
字の下に女にって書いて、らんと読む。そのむさぼり狂うこと。そこがすさぶよ
うに。逆にだからそれに対抗していったのが、睦くおんぶ。睦みという。『睦ぶ久遠の
夢一つ。われらは茲こゝに結ぶなり。社大、社大、おお、われら』

この睦ぶ姿がこれ。2 時に公園。そのまま幼稚園の中にこの、遊んでいていい
よってなるとルールがめちゃくちゃになっちゃう。20~30 秒ほど歩くと、ここ
に来れるんだよ、うちは。ここに子供が親子と一緒に。親たちは親たちで、こ
ういうふうにもうゆっくり話している。周りがしっかり囲まれているから、だ
から心配する必要一切ない。子供は子供同士で遊びまくっている。親は親同士
で話しが盛り上がっている。もう、いろんな意味で解放されている。安心して
解放されている。睦み合っている。

いかに睦みの力、睦み合う力、まさに社事大の校歌そのものということ。昭
和 21 年っていうのはだから、みかんの花咲く丘。あれも昭和 21 年。大変な時
代に、あんなほのぼのとしてくる歌を作詞作曲してくれた。だから、『緑のそよ
風、いい日だね』って。それも昭和 21 年。

貪婪どんらん、汚濁おじよくの時に、やっぱ世の中をいい方向に持って来ようっていう力が働

いて引き上げていったんだなって思う。

だから、これはもう最近思うのは、本当に人間の魂じゃない人間が、これいるのは間違いないなと。本当、動物以下の魂で人間の姿をしているのは、どうもいそうだなって。だから、逆に、周りが睦んでいけば、その魂は悪さできない。周りの睦みの力が弱くなると、そういう人間じゃない魂の人間が悪さを起こせる状況になるということではないかなと。

結核菌なんかも、もう 2 億年ぐらい前から確か誕生しているわけで。これはやっぱり思うのは、人間の敵は人間じゃないぞと。感染症も、空気で感染しちゃうんだから、一番結核は感染力が強いんだから、これは神様が仕組んだんじゃないかなって。人間が人間を敵として争っていると人類は滅びるぞと。人間の敵は人間の共通の敵である感染症とか病気、それに結束して向かっていけ。そういう人類の精神を育てるために、わざと結核菌を神様が仕込んだ。創造主が仕込んだんじゃないかって。そんなことをちょっと思ったりするわけで。

人間の命は腸が 9 割。この腸の中の、正確かどうか分かんないけど 1,000 兆個といわれる微生物で、善玉と悪玉と真ん中の日和見菌。善玉がしっかりしてチームを作ると、悪玉は人間を病気にさせることできないんだよ。悪玉のほう为主导権握っちゃうと、もう免疫力が落ちて、がんになったり、病気になっていくわけだよ。だから、いかに腸の中もそういうことの仕組みで成り立っているかということ。がんを、人間がむしろそれもひどい状況をちゃんと立ち向かっていかなきゃいけないけども、その前でとにかくみんなが手をつないでいるということを作り出しておくということが、まだ。

よく園長の時に、モンスターペアレントに 1 人で立ち向かわせるな。見たらすぐ飛んで行けって。2 人か 3 人でそういう親に対応するんだ。結局 1 人で対応すると、もう平気でうそを言われるから。だから、そこに証拠、証人としてもう 1 人が立ち会っていればということをよく。

(坂田教育長)

今、市長のお話の中で幾つもキーワードがあったと思うんですけど。やっぱり睦み合う力、周りの睦み合う力っていうのが、親をつくっていく。孤立している親を。決して孤立をさせないっていうことですよ、一番最後のお話は。

また、善玉菌が主導権を握ることによって悪玉菌を食っていくと。これはどういうことかということ、良いまちをつくれれば、一人一人良いまちをつくれれば、良い学校も良い家庭も育ってくると。こういうお話につながる。地域づくりがこういう家庭を救っていくんではないか。家庭の教育力を高めていくのではないか。これは宮川委員のご提言につながると思います。

前半部で、だいぶいい示唆を頂けるようなお話が出てきましたが。ちょっと

論点を変えて、家庭教育の現状についてこれから議論をしていただきたいと思
います。

まず、私からちょっと議論の材料をご提示申し上げます。家庭における食習
慣です。これは市と国の学術調査を合わせたものですが、ここにはこの
ように書いてあります。食は生物として生きる源泉であって、成長や健康の基
礎であることはもとより、健全育成や学力・体力にも大きな影響を与える。第
一義的責任は家庭にあることは論を待たない。食育も第一義的責任は家庭に
あります。

そういう中で、朝食を摂取しているかどうかというような子供たちを調べて
みますと、多くが摂取しているんです。8割方の子供たち。どちらかといえ
ばっというのを含めると、もう9割5分を超える状況です。

私、一番注目したいのは、やはりここなんです。1.5、0.3、0.9、0.9。人数
にすれば10人弱といったところだと思うんですが、こういう子供たちは
食べていない。朝食を食べていない子供たちが本市にもこれだけの割合で
いるというようなところは、これ家庭教育の現状としてわれわれは押さえてお
かなければならない問題だと思います。

この1つの方策として、今日も定例の教育委員会で話が出ましたが、いわ
ゆる子供食堂のような形です。地域が、まさに先ほどのお話に出た、地域が家
庭を支えているというような実態もあるということです。この食習慣のこと
についても、後ほどまたご議論ください。

これも、もう1つデータを示させていただきます。困窮家庭の子供は栄養
摂取に偏りがある。これは、平成28年の東京都の、子供の生活実態調査とい
うのを東京都がやりましたが、その中からピックアップしています。

実は、これは東京都の子供実態調査の中で、生活困難層というのは小学校5
年生、中学校2年生でおおよそ20%前後いる。その中でも、困窮層です。こ
の人たちが5.7%、7.1%ということです。周辺層を加えますとこの数になる。
一般層がこういう数になっています。いろいろ、この定義の要件はあるん
ですが、一応この数があるということをご理解ください。

そういう子供たちは、野菜の摂取量が非常に低い。毎日食べている子は55.6%
しかいません。一般層は76%食べています。逆に、全く食べていない子供
たち、もしくは週1日以下という子供たちが、このような形でやはり多くな
っています。これは栄養にも偏りが出ているという。これは、経済状況と食
との関連性を表したものであろうと思います。

もう1つデータを示します。議論をしていただければと思います。家庭は
子供にとって初めて出会うコミュニティであって、親子の関わりから愛情
や信頼、規範や知的好奇心などが育まれていく。家庭教育の復権は、親子
の関わりで見

つめ直しにかかっていると書いても過言ではない。これは私のコメントです。

家族と日頃からよく会話をするっていう子供たちの数を示しています。ただ、ちょっとこれ一概に比較できないのが、小学6年生と中学3年生はこういう説明になっています。家族と、学校のことをよく話す。ちょっとここと開きが出ているところをご容赦ください。

そういう中でも、やはり全く会話をしていない子供たちがこれだけの割合でいるということは、やはり果たしてどうなのだろうかと。非常に大きな問題であると思います。

もう1点。これはアプリです。これは皆さんご存じかもしれませんが、子育てアプリというのが最近はやっています。子供が泣いたり、片付けをしないとか、言うことを聞かない、ご飯を食べないとかいうようなときに、おばけから電話がかかってきます。

子供が持っているスマートフォンにこれがかかってきて、パッと受信状態にすると、このおばけが「何をやっているの」って言うわけです。他にも赤鬼が怒ってくれるわけです。親の代わりに怒ってくれます。こういうアプリのダウンロード数が増えていると、こういう現状があります。

果たして、本当にこれでいいのかどうかというところ。

もう1点、ちょっとこれ見ていただけますでしょうか。実は、初音ミクと鼓童のコラボレーションです。これはバーチャルです。もちろん、こっちは人間ですよ。これは鼓童という演奏集団です。

どこがリアルなのか、どこがバーチャルなのかって、ちょっと見分けがつかなくなってきました。バーチャルとリアルの違いってというのはどこなんでしょうか。これ、分かりますか。ほぼ分からない。

こういう実態がある中で、本当に子供たちは正しく育つのかどうかというところ。これも現状として把握をしながら、清瀬の家庭教育の現状っていうものをお感じになっているところを話し合っただけというふうに思います。

まずこれは植松委員から、いろいろヒアリングをされてらっしゃるところがあると思うので。清瀬はどうでしょう。清瀬の保護者の感覚というんでしょうか。今、朝食の摂取状態とか貧困の状態、一人親の状態等々も話しましたが。

(植松委員)

幼稚園とか回らせていただいて。小学校とか、それから給食の場面とかお弁当の場面とかっていうのを見させていただいているんですが、給食の時、幼児の子供たちは、おいしくないとかやっぱり口にしないっていう子供が多くなってきているかなって。清瀬だけではなくて、いろいろなところでも。

それから、冷たいので、お母さんのお弁当はじゃあ食べるのかってなると、

お母さんのお弁当も結構冷凍をそのまま家で揚げたりとか、レンジで温めたりとかする人たちがすごく多くなっているんです。本当に卵焼きなんか、お母さんが本当に作ったのかなって。絶対作ってないで、レンジで温めただけの卵焼きを入れているなっていう人たちも出てきているんです。お弁当の中にさえ。でも、それでもお弁当のほうがまだ給食より食べているかなと感じます。

それと、いろいろな相談の中で出てくるのは、相談をしている人たちって結構、食事には気を使うんですよ。頭に良くない、いいものって考えているので、割合にちゃんと作ってらっしゃるんですが。でも、外食も結構多いです。

外食して、じゃあ子供たちだけで食べさせ。中学生とか高校生ぐらいになると、自分で、お金を渡して自分で買って弧食っていうか 1人で食べさせていましていう人も出てくるんです。

でも、小学生は少なくともお母さんがいるんですね。仕事してない人たちは、です。仕事していて預けてらっしゃる方たちも、7~8時ぐらいに食べさせているんですよ。

だから、そういう人たちはどんなふうにするんですか。8時ごろ帰って来てって言うと、やっぱり買って来るって。コンビニに行って、おかずになるようなもの買ったり、デパートで買ってそのままドンと出す人もいますよ。買ったお皿のプレートのまま。お母さんによっては、ちゃんとお皿に分けて、綺麗に分けてそこにレタスとかを敷いて食べさせていますっていう人もいらっしゃるんです。だから、買い物であっても工夫しているお母さんの子供はおいしくて食べるんです。でも、そのまま渡された子のお話を聞くと、すごく嫌だって。

(坂田教育長)

なるほど。ということは、親の食に対する感覚というか考え方というものが、子供に影響を与えてしまっているっていう、そういう実態ですね。

(植松委員)

左右しちゃっています。

(坂田教育長)

ありがとうございます。宮川委員、この食の話題が出ていますが。食も含めてなんですけども、親の食の感覚と子供の成長、もしくは食に対する意識が非常に強く相関があるのではないかというお話が出ました。何かご感想があれば。

(宮川教育長職務代理者)

そこはもうおっしゃるとおりだろうと思うんですけど。先ほどの議論にちょ

っと戻るんですけど。教育長が作られた文章の中で、3つ目、括弧1の3つ目。居酒屋で11時、12時に子供が走り回っている、本当見掛けることが多いので。自分たちは経験ないだろうけど、もし立場を、将来に想像したときどうなんだっていったときに、やっぱり確定的なことは言えないけど、欠乏感とか、何ていうのかな、満たされない気分っていうのがやっぱりあるんじゃないか。

それを取り戻さないと、うまくいかないんじゃないかと思うんです。そうすると、どうしたらいいのかっていうと、やっぱり今清瀬市が、この後の議論になってくるんでしょうけど、学校支援本部。そういうのが学校支援本部っていう名称じゃなくて、もっと地域の中で、なんかそういう精神的な欠乏感っていう部分を満たしていくような部分っていうのが、先ほど申し上げた、親の教育力。教育力が下がっている人がいるとかそういうことじゃなくて、やっぱりそういう状況が現象的に教育力を低下しているように見えるんじゃないのかなって思っただけなんです。だからこそ、先ほど市長からお話のあった、あのような空間がなくても、あのような語りの場かな。だから、居酒屋さんに子連れのお客は何時までなんて、そんなルールを作ったり、そういうお店の人が断るっていうのは難しいでしょうから。

やっぱりそれ良くないよねっていう、それやめようねっていう、そういうやっぱり文化っていうんですか、そういうのをどうやって作り出すかっていうこと。かつてあったものがあつたわけじゃないですか。変な意味で世間体っていうことで、そういうものを縛っていた部分があるんでしょうけど。でも、そういうものの中のいい部分をもう一回見つけ出すっていうか、作り出すっていうか、しなくてはならないんじゃないかな。

(坂田教育長)

実はその機能は清瀬にあつて。ウイズアイとピッコロという2つのNPO法人がありますけれども。ウイズアイなどは親のサークルを持っていて、支えの機能というのがある。そこでは循環の機能もあるんです。支えられた親が、もう自分の子供が手離れたとき、今度は支える立場に回るっていう、こういう非常にうまい循環があの中で発生をしている。だから、支えの機能っていうのは、社会的な支えの機能っていうのは、清瀬の中では、非常に優れたものがあるのではないかなと思っています。

ただ、今宮川委員がおっしゃったような意識の部分。例えば、こういうのはやってはいけないよねって。子供を居酒屋に連れて行ってはいけないよねっていうのは、われわれの中では当たり前のようにあつたけど。それがもう当たり前じゃなくなってきたところについては、はっきり言って手は打てていないのではないかなと思います。

ウイズアイやピッコロは、支え合いですね、あそこは。子ども家庭部長。

(矢ヶ崎子ども家庭部長)

そうですね。子育てはすごく孤独感にさいなまれる人が多くて。ウイズアイやピッコロの人たちもそうですけど、広場事業とか、お母さんが子供を連れて来て、ママの大変さを分かち合うっていうので、かなり清瀬はそれで助かっているって話は聞きます。結局、そこに来れる人はいいんですけども、来れない人。そこは今問題視されているところです。

(坂田教育長)

なるほど。来れない人をどうやって引っ張ってくるかっていう問題もありますけれども。

兵頭委員、どうでしょうか。今、食育の話、またアプリの話等々が出てきて。また、そういう支えの話というところも出ていますが。

(兵頭委員)

まず、食に関してですが、食べてないっていう、その子供の調査もありましたよね。わずかだけれども全く食べてない。こういう家庭環境を考えたときに、保護者が、夜も働いていて、朝の子供の登校時には寝ているというような状況が多いかなということだと思います。それからあとは、野菜の摂取量も生活の困窮者は非常に少なくなっているのも、これも本当に今、経済格差が大きくなり、かなりの貧困な状況ってあるわけです。こちらの想像以上に、やっとその日の食べるものがあるかないかっていう状況の子もいる。そういう貧困層の子供たちの野菜摂取が難しい状況がある。それに合わせて、そういう家庭の保護者が自分自身の能力の問題ということもあって、なかなか調理もすることが難しいとか、そういうものを食べさせることの価値が分かっていないとか、そういう場合も含まれているかなと思います。貧困がまた貧困を生むってというような、そんな状況も改善していかねばならないと思います。

それから、家族の人間関係の中で、会話をするっていう中に、ほとんど話さないっていう子がいたっていうことですけども、学校のことをよく話さかって言われたら、特に中学 3 年生なんて当たり前に話さなくなってくるかなと思います。基本的にはこの調査は、私はよく話しているという印象を持ちました。どちらかという、「話している」ことよりも、私は「子供の声を親が聞く」。聞いてくれているかなっていう疑問があります。「自分の話を聞いてくれているか」っていうような質問のほうが、より実態が見えるかなと思いました。「話している」っていても、比較的親からだけの発信で、子供は「ふんふん」って

聞いているような、そういう状況がなんとなくイメージされました。

それから子育てアプリですけれども。やっぱり自分で言っても聞かないときにこういうものを使うのは、すごく短絡的な発想ですよ。けど、今こういうものが出ている、そういうものを使ってやらなきゃ子育てもできない時代なのかっていう印象です。親が子育てに、自分に自信もない、子供に言い聞かせる自信もないからこういうものを使ってしまう。子育ては面倒だっていうこともあるのかなと思いました。

ただ、バーチャルの話と現実の問題が、なかなか区別がつきにくくなっていると言いますけれども。本当に価値観が多様化していて、大人の生き方も、かなりいろんな範囲で生き方を認めなきゃいけない時代になっていると思います。

もう、こうじゃなきゃいけない、この生き方が正しいとか、そういうものではもう今の時代はなくなっている。そうすると、いろんなものを受け入れながらも、自分自身が親も子供も、私はこうやって生きていこうとか、自分が確固たるものを持って選択していく時代だと思うんですよ。また、人のことも容認していく必要がある。

そういうときに、やはり孤立しているお母さんは辛いだろうし、自分自身も誰かとつながっていたいっていうのは本音のところではあるかな。でも、それが自分からは難しい人たちも多いだろうなと思います。

承認されて初めて自分の価値感に自信が持てる。社会や地域の中で認められて、初めて私も役に立つ、人からありがとうって言われたっていう経験、そういうことが保護者にも大事なかなと思います。

(坂田教育長)

なるほど。ありがとうございます。次の具体的な施策のほうにつながっていくような、ご意見をたくさん頂戴しました。親同士がつながっていかないと、自信を持たせるにはどうしたらいいか、認められるにはどのような場面を与えればいいのか。親も子も自分の生き方を選択できるような社会にしていくためにはどうしたらいいのか。

次の、具体的施策のほうにつなげていただければと思うのですが、粕谷委員どうですか。

(粕谷委員)

まず、朝食の摂取状況についてなんです。これは、子供の回答ですよ。食べているっていう中でも、どの程度取っているのかっていうところが非常に気になって。なぜかと言うと、僕自身もやっぱりこの問題っていうのは、幼稚園の子供でもやはり朝食を摂取してない子っていうのがどのぐらいいるのかな

っていうところで。

大体、今日の朝何食べたのって聞くんです。それはどのぐらいの子が食べていて、どのぐらいの子が食べていないとかっていうのを個人的に知りたいっていうのもありますし。そうすると、ここに出ている割合だと、例えば、4年生だと1.5%ですか。それ以上に食べてない子って実際はいると思うんです。もしくは、食べているとしても、じゃあ何食べたのって言えば、スープを一口飲んできたとか。例えばですけれども。何か口に。チョコレートかもしれないけれども、それを朝食と子供が解釈しているから食べたと言うけれども、しっかり食事と言えるような食事を取っているという意味ではもう少し減るんじゃないかなと思います。

その辺はどこまで正確に調査ができるのかっていうのは疑問がありますけれども。もう少し深刻に考えたほうがいいのではないかと思います。

先ほど、兵頭委員もおっしゃっていましたが、うちの園では、給食とお弁当を選択できるようになっているんです。どちらでもいいと。必ずしもではないんですけれども、給食を頼む方っていうのは、もちろん仕事されていてご家庭の都合でという方もいるんですが、意外と貧困層に当たるのではないかっていう方の割合が高いと感じます。金銭が発生するにもかかわらず。というところで、食事を作るっていうような環境にもう貧困の時点でない。要するに、私生活自体がそういう状況で、家事ができるような状態じゃないんじゃないかなと思うんです。本来、金銭的に困窮していれば自炊したほうがもちろん安くあがるということはもう分かるはずなんです。そのサイクル自体が立て直せない状態にあるのかなと思います。

(坂田教育長)

なるほど。非常に難しいですね。だからこそ、さっきの話に戻るんですが、子供食堂とか、そのような社会的なセーフティーネットが必要になってくるって話だと思うんですが。市長、何か今までの議論を聞いて、市長のお感じいただいているところはありますか。

(渋谷市長)

板橋区の幼稚園で、カイコ飼っているわけ。放っておくと繭から卵が生まれて、ずっともう6~7年自宅で面倒見ている教員がいる。冬場なんか、今はカイコの餌、固形の餌を与えて。そのカイコが本当の桑の葉食べてしまうと、もう固形のは食べなくなると。動物直感力だなんて。

人間も動物直感力をしっかり育てるのが、一つには本物の教育かもしれない。富士見幼稚園では、畑専門の正職員を置いているから。今日も畑に行ってイチ

ゴを直接取って食べる。キャベツは消毒してないから、キャベツの葉っぱも畑で食べる。これとか、スナックエンドウ、トウモロコシ、ジャガイモ。だから、実際にそれを体験しちゃおうと、スーパーで買った野菜をお母さん、これ違うって子供が言い始めちゃう。そういうふうに、本物の味を小さい時に感じさせちゃう。カイコと同じ原理を働かせればいいのではないかと。

五中は中学生になってからだけど、EM 牛糞を持って行って、大きい大根がしっかり育つから、もうその手応え感で子供たちは喜んでいる。わずかな園地の中での花壇で作ったものでも、やっぱり実際に取れたての旬の本物の味を楽しませることができる。そういうできる範囲内で具体的な方法論としては。

(坂田教育長)

今の食の直接体験っていうんでしょうか。これは動物直感力というふうにおっしゃいましたけれども、これは、子供の原体験になっていくと思います。

昔、私も同じ体験をして、畑で食べたトマトが非常に青臭い。最近、そのような青臭いトマトって食べたことないと思うんですけど。青臭いトマトっていうのがもうなくなってきているんですよ。本当にあの青臭さが非常に私の中では原体験になっていて。やっぱり今、市場に並んでいるトマトは、私の中ではトマトじゃないと思っているんですけども。

この直接体験、親のほうがなかなかできないのであるならば、ある意味では学校とか行政とかっていうところが直接体験の場を与えてあげる。こういう必要があるのではないかという議論になるかと思うんですが。

(渋谷市長)

農業委員会がちゃんと職場体験で、各農家にかなりの人数を受け入れる。

(坂田教育長)

はい。それとともに、市長、ちょうどいいチャンスですから。私たちが今考えている施策、前々からお話ししていますが。神津島の体験教室です。生活体験学校。5泊6日、本当に子供たちが自分で魚を釣って、苦労しながら三枚におろして、木の実を摘んできてそれを炒めて食べてっていう。まさにそういう困難体験と食の原体験、それも私はぜひ子供たちにやらせたいというふうに考えています。

(渋谷市長)

以前には、鳥の頭を落として。あれもだって、実際それで空腹になっていると、その鳥を食べちゃうと。だから、そういう動物的に追い詰められた状況を

体験させることによって、肉体を抱えている生き物としての自分を捉えるっていう、そういう、30年ぐらい前の教育。

(坂田教育長)

もう一回そこは、われわれも見つめ直してみるというか、必要があるのではないかと思うんですが。宮川委員、この直接体験っていう話になっているんですがいかがでしょうか。

(宮川教育長職務代理者)

そうですね。私もどうしてもやりたくて、中学校3年間、コンクリートだらけの校舎でしたけど、体育倉庫の建物の上にあった畑でいろんな野菜を育てたんです。あの大都会の子供たちが、キュウリにトゲがある。トゲがなくなるとおいしくないんだとか。

だから、おっしゃるようにそういう原体験がなくなっているから、それをどうやってっていうことはとても大事だと思うんです。だから、そういう学習の機会を学校はいくつか作れる。だけど、十分作り得ていない。それは先生方の負担感だとかっていうことで、どうも怪しくなっている。

だから、そこは逆にこういう時代だからこそ、先生方にある意味で苦勞していただいて、移動教室だとか林間学校だとか、そういう作りをもう一回考え直してもらえればいいのかも说不定。でも、それでも追い付かないと私は思うんですよね。

貧困の問題とかいろいろあるんですけど、私はやっぱり小さい頃聞いた歌で忘れられないのが。美輪明宏さんが若い頃歌った歌で『ヨイトマケの歌』ってありますよね。でも、あの歌に出てくるお母さんと自分ですよ。いくら貧困の中にあたって、人としての尊厳を忘れちゃいけないっていう親の中で育て、あれだけの教養人になって今、演劇界にいらっしゃるわけじゃないですか。

だから、われわれが失っちゃいけないものを失っていることにどうして気付かせるかっていうと、学校とか地域だけじゃ、なんか頑張りましょうといたって始まんないと思うんですよ。だから、そこをどうするかっていうことです。

そうすると、先ほどのその居酒屋での一コマじゃないんですけども、どうしても親たちの間でやっぱりいいことはいいことだよ。いいことやっていくような形にしていかなきゃいけないよねっていう辺りは、やっぱり学校を起点にするのか、あるいは地域を巻き込んでするのかってあたりを考えていかなきゃならないと思っています。

少し脱線しますが、たまたまこれを頂いたんです。男女平等に関する意識実態調査。これだけにお金がかかっていると思うんですけど、ここからじゃあ、

次の施策は何が見えてくるのか。行政として何がやれるのかという目標も課題じゃないですか。

だから、本当にこういうものを作ったならば、ここから次の施策が出てくるようなこと。あるいは、次はこんなことを清瀬はやっていきますよっていう声が見えなかったら、ちょっと話にならないんじゃないのかなと思います。

ですから、私は、人として失ってはいけないようなものがどうも曖昧になってきている。だから、それが今話題になっていた、その動物的な直感ですか。そういうものをもう一回、どういう形で見直していくのかっていうことを一つのプログラムでも作って、学校や地域や家庭も含めて、なんか打っていかなくてはいけないのではないのでしょうか。

あるいは、こういう男女平等に関する意識の実際を調査したんですから、ここから出てきている問題で何から手を打っていくのかっていうことを総合的に考えていかなくてはならないと思います。

だから、今日は申し訳ないけどそういう話の方向性をある程度出しておいていただいて。そして、次に教育委員会なら教育委員会で何ができるかというこ検討していく。そしてまたこういう機会に反映させていくしかないんじゃないですか。

(坂田教育長)

はっきり言って、そう簡単に結論が出るわけではないと思いますし、この 1 時間半で結論が出てしまったら、これは今まで社会が悩んできたことはなんだったんだってという話になりますので。われわれの結論は、ほとんど見えないだろうなっていうふうには思っています。

思っていますが、やはり方向性ぐらいは、共通認識はしておきたい。まずは今日話が出た中で、やっぱり地域づくりっていうのは一つの大きなキーワードであろうと。いい地域をつくることによって、いい家庭、家庭を支援することができて、その家庭が良くなっていくっていう側面。

もう 1 つは、やっぱり親同士が今度はつながっていくような場を作る。お互いに支え合ったり自己肯定感を高めたりできるような場を、これは教育委員会ができるかもしれませんが、市長部局ができるかもしれない。今もやっているところはあるけれども、それをもう一回見直して、より良く、より強めていく必要があるだろうということ。

もう 1 つは、やはり体験というお話でした。やっぱり原体験をもう一回大切にしていこう。今、宮川職務代理者がおっしゃったように、失っては決していけないものっていうのをもう一度見つめ直した上で、そこを復活させるための何か体験的なものっていうのができないだろうか。そういうプログラムを総合

的に考えていくことはできないか。こういう話になったのではないかなと思います。

実は、本当でしたらば、このようなご提案も。これを見てください。これ、私の。これはベネッセが調査しているんですけども、保護者は本当にたくさん悩んでいますと。あなたはお子さまの、あなた自身のこと、お子さまたちのことについて次のような気掛かりはありますか。トップがなんと整理整頓、片付けがずっとなんです。

親の一番悩んでいるのは整理整頓、片付け。これが悩みなだそうです。小学1年生から高校生まで。

これも分析をしてくと本当に面白い傾向が見えてきて。例えば、家庭の経済状況は、小学1年生とか小学3年生はこれぐらいなんです。33%。ところが、だんだん上がってくるんです。高校生ぐらいになると37%ぐらい、家庭の経済状況が悩みになってくる。だから、これを分析するときと面白いだろうな。なんか実態が見えてくるんじゃないか。

これは民間企業の調査なんですけれども、子育ての悩みを誰に相談するかってところで、やっぱり配偶者なんです。ところがこれ、一人親家庭はどうなるかといったら、相談できないんです。

それで、今言っているような、話題に出てきたような貧困家庭なんていうのは、もう働く、その日の生活で精いっぱいですから、友人とかなかなか作れない。そうすると、誰に相談するんですかっていうこと。相談の受け口がないんです。これも親を追い込んで、家庭環境を追い込んで、家庭の教育力を追い込んで。私は一つの要因だろうと思います。

これ、私の自慢をしていいでしょうか。私、実はT区立I中学校っていうところにいたんですけれども。その時、2年1組の担任を持ちました。その時に私が保護者会の皆さんと共に作ったものなんです。同校は都内でも有数の荒れた学校だったんです。非常に荒れた学校でした。2学年も同様だったんです。保護者から、自分たちがまずはっきりしなくてはと言ってくださったんです。それで、この10カ条を作ったんです。

わが家では、おはよう、いただきます、おやすみなさいのあいさつや、ありがとうを必ず言います。わが家では、子供にたくさん話し掛けます。子供の話をしっかり聞きます。わが家では、朝食をきちんと食べさせます。食事の時はテレビを消します。わが家では、役割を与えて必ず実現させます。良い点を褒める、認めます。毅然とした態度で、駄目なことは駄目と言います。先生の悪口は絶対に言いません。早くしなさい、勉強しなさいはなるべく言いません。子供が勉強しているときは親も家の仕事をします。できる限り親子で地域の行事に参加をします。

こういう 10 カ条を、2 年 1 組の保護者と一緒に作りました。私が何を言いたいかというと、何かこういうような。例えば、会津藩は会津の心得っていうのがあるわけです。何か、清瀬でも家庭教育の、それこそ精神論になってしまうかもしれないけれども、こういうよりどころになるようなものがあってもいいのかなというふうに思います。

それで、ここにこういうふうに。一見すると当たり前のことですが、どの項目も実行するのはなかなか難しい。両親が共働きだったり、あるいは一人親の家庭はなおさら。それでも、ほとんどの家庭で冷蔵庫や家の壁に貼って頑張っている。10 カ条全部できない家庭は、このうち 1 つでもやってください。1 つでもいいというような取り組みを進めたんです。なんか、こういうことも 1 つかなと思います。

もう 1 つ提案をします。親がです。実はこれ、新次世代育成行動計画の中でアンケートがあって、両親学級というのがあるんですよね。

両親学級に参加したか、参加しないかっていうところのデータを分析しますと、参加したのが 26%。参加しなかったのは 73%もいるんです。参加したのは 40 歳代で 3 割以上。不参加は世帯年収 400 万円未満。やはり貧困家庭は参加してないんです、こういうところ。

不参加の理由、「事業の存在を知らない」、「清瀬市民でない」、「どちらかの親が参加できない」、「興味を引く内容ではない」、「病院で受けた」。

こういう、両親学級っていうのはどういうような形で実施されているか、そのプログラムは分かんないんですが。何か教育に関連付けて、そこで 5 年後、6 年後、10 年後にはお子さんたちはこういうようなところに足を踏み込むから気を付けましようねっていうプログラムを加えてもいい。

最後です。こういうことも取り組んでいる自治体もあります。足立区は、日本一おいしい学校給食を目指しているっていう話で。レシピを作っているんですね。これが非常に簡単に作れるようなもので。先ほど粕谷委員がおっしゃったように、なかなか、それこそ献立っていうか、台所に立てないような家庭にはなかなか伝わらないかもしれないけれども。こういう取り組みも、次の層の方々には有効なのかもしれません。

(宮川教育長職務代理者)

足立区は 3 年前に全家庭に、いわゆる家庭の経済状況を公表しましたね。ということから手を打つということで、まだ十分手を打ち切れてないで。やっぱりそういうやり方っていうのは限界があるんだと思う。だから、どんなことができるのか、あるいは限界かどうか分かりませんが。

例えば、保育士を目指している、あるいは幼稚園を目指している学生の中に、

周りの学生が自分の子供ができたらあなたに面倒見てもらいたいなって。その子に私、なんかひょんなときにニックネームを付けたというか、「長屋のおばちゃん」って付けちゃったんです。本当に勉強もするけど世話焼きでもあるんです。そして、何かほかの子が、これはあまり今ここでやるべきことじゃないなという、「やめたほうがいいよ、それ」っていうようなことをサッと言うような子なんです。でも、日本の教育水準を本当に高い位置に江戸時代からずっと上げてきてたのは、そういう人がいたからだと思うんです。

だから、清瀬はこれだけのまだ遊休地がある。例えば、大林研究所の隣辺りにまだ山林ありますよね。あとは、清明小の丘陵っていうか斜面とか。なんか、ああいうことでいろいろやっているんでしょうけど、もっとああいう所で、月に1回ぐらい地域の子供たち集めて、デイキャンプのようなことだとかして、それこそ作って食べることで、育てたものを料理して食べることで。

そうやって、隣近所のちょっとおちゃめな子も含めて、今はいいけど、本当はそれ認められないんだよっていうようなことを。やっぱり遊びというか、一緒に食べたりしゃべったりする中で教えてくれるような、そういうところ。

そして、約1割いる一人親家庭のお母さん、お父さんだって、安心して子育てできるまちがここですよ。それは、そういうことやっているからですよっていうことで、このまちの持っているそういった資源をもっと生かす。

そして、そのために地域の皆さんにもっと協力いただいて。そして、それによって新座市に負けないぐらいの、自治会の加入率。新座市は7割、75%ぐらいでしたよね。だから、やっぱり自治会がそれだけ組織率を持っているっていうのは、やっぱり望ましいことだと思うんです。だから、そういうものをもっと生かして、未来の子供たちを育てるような環境づくりというか、あるいはそういう取り組みをしていったならば、そのまちに移り住んで、そこに税金を納めてもいいっていう大人が増えてくれるのではないのでしょうか。

だから、そういう意味で今清瀬が抱えている子育ての問題だとか貧困の問題だとか、さまざまな問題を考えたときに、この町が持つてるそういう資源、歴史的な文化的な、そういう聡明な部分をもっとみんなで共有するようなことも発信していったらいいんじゃないのかなと思います。

(植松委員)

お聞きしてもいいですか。親の駆け込み寺ってありますか。

(矢ヶ崎子ども家庭部長)

子供家庭支援センターが、親のそういった支援をしています。

(植松委員)

両方、父親とか母親とか母子・父子家庭の方とか、おじいちゃん、おばあちゃんとか、いわゆる大人の相談場所みたいな。気軽に行って、ちょこっと座って、予約も何もしないでふらっと行って話し相手してくれるっていうような場所になったら。行けば話を聞いてくれるという。そういうものを大々的に宣伝するといいかもしれませんね。きっと、ふらっと行って相談したい人がいっぱいいて、話をとにかく聞いてほしい人がすごく増えてきていると思うんです。それも、子供のいない時間に行って話聞いてくださいっていう方が多いように感じています。

私なんかボランティアでやればいいんだろうなって、実は少し思っているんですけれども。

(兵頭委員)

親の相談場所があればという話がありました。子供食堂をやっている意図として、子供の食事を補っていくことが一番ですが、例えば、仕事帰りの親が保育園から子供を連れて、帰りに寄って食べて。そういう中で、親がちょっと悩みを話せるようなそんな場になるといいねっていうのも、子供食堂をやっている人の声として聞いてはいるんです。だから、そういう場所も少しずつ清瀬ではできてきているかなっていう実感があります。

あとは、いろんなことを新しくまたやろうとしているときに、今までやってきたものを活用し、少し形を変えて改善すればできるようなものっていうようなことも考えていくといいと思います。

この前もいろいろ教育委員会の考えていることと少し重なりがあることが、また別な部署から発信されたりもしていましたけれど、横の連携で、協力し合ってできるような形を目指していくと、より根付いていくのかなっていう印象です。

(宮川教育長職務代理者)

先ほど教育長が、神津島での自然体験 5 日間、取って食べると。私もそれは賛成です。実は、そういう体験をして、面白い、楽しい、みんなにも一緒に楽しんでもらおうっていう人がいなかったならば。例えば、私が先ほど言った清瀬の遊休地とか、この資源とか、畑に捨ててある野菜を拾ってきて食べようとか、そういう本当に豊かな体験ができるようなまちっていうのは、やっぱりそういう経験者がいて。好きこそもの上手なれで、そういう人を育てなきゃならないと思います。

行ってみてやって良かった。じゃあ、もっと仲間を増やそうっていう、そこ

までいかなかったら仕事として中途半端だと思います。だから、教育長が考えている神津島での体験っていうのが、このまちをどんなふうに変えるかっていうところに、つながりっていうか、発展性っていうか、具体性がなかったらば、やっぱりそれは完結しない。若者たちの共同体験。それが日本の精神性とか文化性を育ててきたところがあると思うんです。だから、今は共同生活体験なんていうと、なんか危ぶむ人もいるから。だから、そういう自然体験を通して、じゃあこのまち中で自然体験を、さらに人の輪を広げていって。そこでなかなか子育てがしにくいとかうまくいかないとか、そういうところで人と人が、これは先ほど本当に市長がおっしゃったところに返っていくと思います。

(坂田教育長)

本当にやらなければならないと思います。市長、最後にコメントを頂ければと思いますが。私から今、これまでの議論をちょっとまとめさせていただきます。宮川職務代理者からお話があった、失ってはいけないもの。決してわれわれの中で失ってはいけないものというのが、ちょっと見えなくなっている。それがいわゆる愛というものなのか、それとも規範というものなのか、それとも知識というものなのか分かりませんが、まだそこは明確ではないですが、失ってはいけないものをもう一度取り返すために家庭の教育力を高めるためには、失ってはいけないものを取り返さなければいけない。そのために、今お話があったような、地域の子供のデイキャンプであったり、生活体験学校であったり、食の直接体験であったり。体験という場をわれわれはやっぱりちゃんと考えていかなければならないだろうということが1点。

もう1つは、やはり家庭でつながったり支え合ったりっていうような、お互いに講とか結とかっていうような、昔の文化でいうと。そういう言葉がもう一回彷彿とさせるような、何かまちにしていけないといけない。それはもう、実

は黎明期^{れいめいき}を迎えていて、ウイズアイやピッコロという所が。また、円卓会議がある。それと、今学校では学校支援地域本部を作ろうとしている。子供食堂という所もある。これを横でつなげていくっていうことによって、このつながり合い、支え合いの機能が強まっていこうと。

3点目は、肯定感や不安、もしくは自分が価値があるっていうようなことを、親にやっぱり思ってもらいたい。それができるような何か仕組みを作っていく。そのためには、親を社会に引きずり出さなければいけない。やっぱり出てきてもらって活躍してもらって、自己肯定感を高めてもらうというロジックが必要になってくると思う。

その窓口っていうのは、もしかしたらさっき話した学校支援地域本部なのか

もしれない。円卓会議かもしれない。そこでまたつながっていきます。ちょっとこれは全体像をもう一度描いてみて、また市長にご提案するというような形を取らせていただければと。

小さいところでは、清瀬の家庭の心得なんていうようなものもありましたし、また、親学。これはぜひ、子ども家庭部長、考えていただきたいのは、両親学級のカリキュラムに、もしも本当に教育っていう観点を、10年後の子供の姿っていうものを織り込めるようなカリキュラムを組めるようだったら、われわれは本当に協力しますので、何かそこはぜひ考えていただくことができればうれしいです。

最後のまとめとしては、今日の議論は、良いまちは良い市民、良い子供、良い家庭、良い学校をつくる。良い学校、良い市民、良い子供、良い家庭は、すてきな清瀬をつくるというところにまとめられるんじゃないかというふうに思いました。

最後に、市長にごあいさつを。もう感想を、思いの丈を話していただいて。時間は5分ぐらいしかありませんが、よろしくお願いします。

(渋谷市長)

先ほどの10カ条なんかに見られる、やはり別の表現をすれば、これこそがこの分け隔てのない、愛の実践。本当の愛っていうのは分け隔てないの。お日さまの光と同じなの。全ての人たちに全ての存在に光を当ててあげる。こういう心構えでいくっていうことが、もう現実的には、30年かかってもちゃんと答えが出てくるという。

実際にスポーツクラブ、この3月に全国の小学生の体操全国大会で、埼玉県代表で6人が出ている。そのうち4人が東所沢のスポーツクラブ。立ち上げの時にそんなことを目指したわけでは全くない。大体、選手育成の担当コーチになるとうぬぼれて、偉そうにして、もうそんなだから。選手育成のクラスに入れば、その親たちもなんかこう、私たちという特別な存在みたいに思っていたから全然相手にしなかった。

もう普通の子供たちが、水泳や体操を通して元気になっていく。そういうスポーツクラブづくりを目指すということできっとやってきて。スタートさせて18年ぐらいはもう人が入れ替わって、いろんなことあった。13~14年たって、初めて新卒2人をまた迎えたときに、やっと普通の感覚の学生、卒業生が来たって。この2人を育てられなかったら、もううちはもう倒産だって。そういうところから切り返しが始まって。今は願っていたとおりの。だから、10カ条みたいなことをしっかりやるわけよ。もうコーチのほうから「おはようございます」っていうことを。「こんにちは」と。何々ちゃんって、名前を覚えてあげる。

どんどん声を掛けてあげる。

指導しているときだって、目の前の子供だけに向かってじゃなくて、待っている子、順番を並んでいる子たちにも心を配っていく。それが本物の指導者だぞと。そういうさまざまに教える力、導いていく力、信じてもらえる力をコーチがもう。

それで、相互作用でやっぱりどんどんコーチが、今は10人いるけど。だから金メダリストの内村選手と一緒に体操やっていたのがうちに来ている。アルバイトで2年間、4年間ぐらいやったかな。それで、うちの社員になりたいっていうことで。でも、10年ぐらい先輩が「もう社長、社員にさせてやってください」って。それで、じゃあ場合によっちゃボーナス下げるからな、全体のボーナスはって。それで社員に、正社員にした。

そういったところから。だから、普通の子供たちを育てていく、あるいは信頼し合っていく。そういう関係になってくると、素質があるのがグーンと伸びるわけ。別に特別にその子をかわいがっているわけじゃない。素質がある子がグーンと伸びて全国大会へ。

だから、分け隔てなく関わっていると、それぞれの場面場面でその個性を輝き始めさせるということだと思っていて。わが清瀬も、本当そういった意味での分け隔てない力がきっと他の市町村より、東洋一のサナトリウムのまちという、もうどれだけおびただしい魂の人が苦しんでも。

石田波郷だって療養俳句、『惜^{しゃくみょう}命』と、命を惜しむという、そういう無数の人たちが清瀬でそういう人生を過ごしたんだから。なんか見えない力がちゃんともうまち自体に鎮座していて。だから、それを大切にしていけば、じわじわとボトムアップしていくんじゃないかなって思っていて。だから、そういうまちづくり、ぜひとも今後ご尽力賜れば。

(坂田教育長)

教育の側面からまちづくりを。われわれは清瀬の教育委員会ですから、清瀬のまちづくりが、宮川職務代理者がおっしゃったように、教育が清瀬のまちづくりに直結しています。そういう気構えでわれわれも頑張っていきたいと思えます。今日はどうもありがとうございました。では、事務局にお返しします。

(南澤企画課長)

ご議論ありがとうございました。主題では(2)その他となっておりますが、事務局のから皆さまにお伝えすべきことはございません。皆さまのから何かございますか。

では、特になしであれば、これにて平成 29 年度第 1 回清瀬市総合教育会議を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

午後 3 時 32 分閉会